

結語 結論と今後の展望

7.1 結論

本論文では、アラビア語という実例を通して、名詞句の限定・非限定という問題を考えてきた。最後に当たり、序論で掲げた問題を振り返り、それに答える形で本論文のまとめとしたい。

1) 限定・非限定という情報構造の特性とは何か。他の情報構造との相違は何か：

①他の情報構造との比較

これについては、親密性、すなわち聞き手・読み手が名詞句の指示対象に馴染んでおり且つその指示対象を同定できると、話し手・書き手の側が仮定できる、その度合いを基準に、限定・非限定という構造とその他の情報構造との比較を行い（第1章）、検討した。

例えば、情報の新旧はある程度客観的な基準で判断できる構造だが、限定・非限定は話し手や書き手の側の仮定によった主観的な構造である。

テーマ・レーマがある情報を伝達する際の、文レベルでの戦略であるのに対し、限定・非限定は文中の名詞句の指示対象・意味するものに対する、話し手や書き手の側の見解を表す手だてである。

対比の構造は、有限個の候補の中から正しい選択肢を提示するものであり、それぞれの候補の例えば定性などは、対比の構造において副次的な要素でしかない。

指示性について言えば、非指示的つまり世界に指示対象を持たない名詞句であっても、それによって表された属性などが聞き手・読み手に馴染みのあるものであれば、限定形となる。親密性という概念は、名詞句の、世界に存在する指示対象に対してだけでなく、その名詞句によって意味されたもの全てに適応できる概念なのである。

②限定・非限定の構造の主観的側面

上記のように、限定・非限定は、名詞句に対する、話し手・書き手の主観的な仮定に基づく範疇であること、またその仮定とは、聞き手・読み手の立場を話し手・書き手が推し量る形で生ずるものであることが、その情報構造としての独自性に関わっている。

しかし、次の問題とも関連することだが、実際には話し手・書き手が聞き手・読み手の立場を考慮するという消極的な態度だけでなく、限定・非限定の構造の運用には、話し手・書き手自身の意図や心理を反映させるという、能動的な要因も大きく関与している（第4章、第5章）。

2) 限定と非限定との使い分けの基準は何か。すなわち、ある対象を限定的な名詞句で表すか非限定的な名詞句で表すかを決定する因子は何か：

①先行研究で指摘された因子

既に先行研究でも、親密性と包含性という因子、さらにそれらの絡み合った同定可能性という因子

などが挙げられている(1.2参照)。アラビア語にもほぼそれが適用できるが、方言間での食い違いも見られた。

例えば「男 (def) は私たちの家の前を車^をで走った」という文で、エジプト方言では、もし「車」を 'arabiyya のように非限定形で表現すると、その「男」に関する共有されたセットから車が除外されていることを殊更に示すことになり、例えばその男が私たちに嫌がらせをするために、どこかから借りてきた新しい車、親密性の薄い車のようなことになってしまうのであった。

ところがマルタ語では逆に、il-karozza と「車」を限定形で表現しても共有されたセットにどう組み込まれるのか了解されず、聞き手は話し手がどの車を特定しようとしているのかと、混乱してしまう。こうしたことから、共有されたセットという概念は共通して存在するものの、その形成には方言差のあることが伺われた。

また抽象的な方向に拡張された概念は、アラビア語では限定辞を伴う名詞句の形で表されるが、マルタ語には、null 形と見なすのが適切ではないかと思われる名詞句の例もあった。(2.6.2参照)。

とは言え、従来の研究で同定可能性や包含性という基準が、限定・非限定の決定因子として挙げられて来て、また本論文でも作例が主の前後の文脈のない例文を検討していた限りでは、特にそれ以外の新しい因子を見いだすにはいたらなかった。

②テキストの文脈上に現れる限定・非限定の主體的・主観的側面

しかし、実際の文脈を持ったテキストの分析・検討を通すことによって、親密性とか同定可能性といった、聞き手・読み手の立場を押し量る方向の要因や、包含性という客観的な基準だけで、限定・非限定が使い分けられている訳ではないことが明らかになった。

例えば、話し手・書き手がある対象の存在に対して確信を持っていると、それを限定名詞句で表現し、逆に確信がないときは、既知の対象に対してさえも非限定名詞句でそれを指示することがある。

また限定名詞句は、その指示対象を話し手・書き手が重要と見なしている、という標識としても機能する。これについては第4章において、状況的・文脈的情報のないテキストの冒頭部分を検討し、特に書かれたテキストの冒頭部分では、テキストの主題に深い関わりのある事物／人物が、読者に親密性を要求する形式であるところの限定形で導入される例の多いことを指摘した。

つけ加えれば、限定辞を失ったプハラ方言においては、照応代名詞の出現という現象が、その名詞句の個別性・卓立性、これは限定的であるか否かに必ずしも一致するものではないが、それと深く関わっている。(3.2.4.2参照)

つまり限定・非限定の使い分けには、話し手や書き手が自分自身の心理(対象に対する確信の有無)や意図(対象に対する重要度の付加)を表現するという、積極的・能動的な面もまた、関与している。限定・非限定という枠組みは、テキストの送り手側によって主体的に運用され得る可能性を備えた、その意味では主観的な情報構造なのである。

- 3) 限定・非限定の使い分けがテキストに及ぼす影響はどのようなものか。ある文脈で用いられた名詞句の定性と、そのテキストの種類や目的とはどんな関連があるか：

①新聞記事に見られる限定・非限定の用法の違い

例えば新聞記事の見出しでは、読者にとっての新情報でも限定名詞句で表されることが良くあるのに、記事本文では新情報は非限定名詞句で導入されるのが普通である、というように、用いられる名詞句の形式に違いがあった(4.4.1参照)。その理由は、見出し文の目的が読者の注意を引きつけることであるのに対して、記事本文は読者に正確な情報を与えるのが目的であるためであり、その目的の相違が、用いられる名詞句の定性にも反映していた。

②テキストの受け手にかかる負担の軽減

また、書かれたテキストに比べて、話されるテキストでは、冒頭部分に非限定の名詞句が出現することが多かった。というのも、書かれたテキストは言語の線状性からある部分で解放されているので、読み手は良く分からないところを読み返したり、重要なところだけ選んで拾い読みする、などということが可能だが、話されるテキストではそうはいかず、聞き手が情報処理に費やす労力は、書かれたテキストを読むときよりも大きい。そこで、聞き手にとっての新情報を限定の名詞句で導入するという、聞き手に過大な負担をかけるテクニックは用いられにくくなる。

③文化的な情報の欠如した聞き手に対する語り

話し手が、文化的背景を共有していない外国人に民俗誌を説明するという状況では、説明のテーマとなる事物が限定形で導入される一方、動作主として「私たち」「人々」といった、聞き手に馴染みのある主語の選ばれていることが多かった(4.5.4参照)。

4) 限定名詞句にも複数の形式が存在するが、その限定名詞句のいくつかの形式のうちのどれが選択されるか、その形式が選択されたことにより、当該テキストにもたらされる効果は何か：

①物語テキストにおける談話 span の転換との関わり

例えば、登場人物を指示するのに、通常はまず非限定名詞句で導入、限定名詞句でそれを受け、その登場人物がトピック化された後には、代名詞などで指示され続けていくのだが、実際のテキストではその代名詞の連鎖が破られることがある。これに関して、コーランの物語テキストにおける名詞句の使い分けを分析した(6.1参照)結果、名詞句の形式は視点のマーカースとして機能していることが明らかとなった。例えば、代名詞から代名詞より限定の度合いの低い名詞句に切り替えることで、視点が移動、物語の場面転換がなされていた。

②代名詞の使用制限

また、テキストの受け手の認知能力等を考慮した使い分けも見られた。

例えば、童話のテキストの書き出し部分では、読者を物語の世界に引き込むためのテクニックとして初出の事物が限定名詞句で導入されるが、子供向けの絵本では、指示対象を同定するために読者にかかる負担がその他の名詞句より大きい人称代名詞による導入は稀である。これは読者の認知能力の発達度合いを考慮した結果と言える。(4.2及び4.3参照)

また話されたテキストでは、テーマとなる対象を指示する名詞句が、すぐには代名詞に変わらず、

しばらく限定辞を伴った形などで表され続けた後で、代名詞が用いられる。場合によっては代名詞化の段階に到達する前に、談話的spanが移ってしまい、代名詞化されないこともあった。(6.3.1参照)

ただし話されたテキストでも、インタビュー形式の場合は事情が少し異なり、質問に対する答ではゼロ照応が多用されていた。質問の直後にそれに対しての答を述べるのであるから、答えのテーマとなる事物は明白であり、それをわざわざ表出するより、この場合はゼロとしておいた方がかえって情報処理の負担が軽くなるためである。(6.3.2参照)

5) テキストの種類・目的によって限定・非限定、或いは名詞句の形式の選び方・用い方にどんな相違が生じるか：

①再び新聞記事について

これまで見てきた問題と重複する事柄も多くなるが、例えばまず、事実を正確に伝えるという役目を持つ新聞記事は、見出しでは、文学作品のように、テーマと深く関わる事物を限定形で導入、読者の注意を喚起する手法が採られたり、また見出しで大雑把な情報を与え、本文でより詳しく説明するという場合もある。これは口語のトピック-コメント構造にもつながる手法であった。

記事本文では、テーマに関わりのある事物を限定形で導入するテクニックは用いられにくく、読者の持つ既存の知識を土台に、事件についての新情報を順序よく提示していく手順がとられる。

ただし、事件の当事者の名は、記事の冒頭からでも固有名詞形で現れることが多かった。記事本文の冒頭で前置きなく用いられる固有名詞は、読者への注意喚起の効果を狙ったものではなく、これは、固有名詞に内包された情報を明示しないで、読者の側にそれらを察知してもらう手法である。つまり、書き手の側が、読者が事件の当事者たちを知らないのを承知の上で使っている固有名詞なのであるが、限られたスペースに最大限の情報を詰め込む新聞記事の特性を物語る用法である。

②話されたテキストなどについて

話されたテキストにおいては書かれたテキストで用いられたような、テキストの受け手に過重な負担を求めるようなテクニックは用いられ難い。そこで例えば、新聞記事の本文に見られたように、聞き手の持つ既存の知識を土台に、物事についての新情報を順序よく提示していくという手順をとって、聞き手に負担のかからない語り出しがされる。

さらにこのように、主題に深い関わりのある人物を限定形で導入するのが難しい話し言葉では、主題に深く関わる人物を、非限定形で導入しつつトピックとして提示して、文やテキスト全体のレベルで、トピック-コメント構造を限定・非限定の構造のかわりとして機能させていることも明らかとなった。(4.5.3参照)

話し言葉や子供向けテキストなど、テキストの受け手に対する情報処理の負担を軽くする必要のあるテキストでは、指示対象の同定に負担の大きい代名詞の使用が減り、定性の低い名詞句を用いる傾向があった。その一方で、トピックの明白な対話形式では逆にゼロ照応が多用され、これは話し手・聞き手双方の労力を省く効果があった。(6.3参照)

7.2 今後の課題

以上、本論文では、限定・非限定という枠組みの特質を、特にアラビア語という事例を通して検討し、その機能を明らかにしてきた。

ただし、始めに、この論文の目的として、できるだけ多くの異なる種類のテキストに当たって、アラビア語を分析することを挙げたが、振り返ってみて、やはり対象が、書かれた正則アラビア語や、口語であっても文字におこされたテキストに偏ってしまったことは否めない。さらに扱った方言にも地域的な偏りがあり、この意味でもアラビア語という言語を総合的には考察しきれなかった。

これは口語アラビア語資料の収集不足、すなわち、フィールド調査の不足が最大の原因である。今後、地道な現地調査、インフォーマント調査を積み重ねていくことが必要である。

特に各方言間の相違については、単に地理的に離れていることだけによるものではなく、マルタ方言に対するロマンス系言語、プハラ方言に対するチュルク系或いはイラン系言語の影響などにも見られるように、周辺言語の影響による変化もその大きな理由である。つまり、より緻密な考察のためにはアラビア語以外の言語についての検討も必要である。また、他のセム言語における限定・非限定も射程内に入れることで、より幅広い考察が可能になるであろう。

また、限定・非限定そのものの考察に関して言えば、限定辞のみにとらわれず、限定名詞句全体を考察対象としようとしたものの、省みれば、本論文のかなりの部分で、限定辞を伴った名詞句に関する考察が大きな比重を占めている。限定辞を伴った名詞句以外に関する検討を、今後もっと深めていかなければならない。

所有表現に関しても本論文では殆ど触れないままであった。多くの方言で、正則アラビア語の t-b- (所属する、などの意味を持つ語根) から派生した語を、例えばエジプト方言の bitā' のように、所有のマークとして用いている。それらの用法についての詳しい調査も行いたいと思う。

限定・非限定とその他の文法範疇との関係も、表層的な提示にとどまってしまった感がある。例えば本論中で触れた、態や時制・相などと名詞句の定性との関わりが、テキストの展開にどのような影響・効果を及ぼしているかについて、さらに精密な分析が必要だろう。

アラビア語の限定・非限定を総合的に論じるためには：

- 1) さらに多くのテキストを分析の対象とすること。

文字でないテキスト、話された生の資料の収集、そのためにもフィールド調査は不可欠である。

また収集したテキストを分析するため、方言の習得そのものにも力を入れる必要がある。

- 2) アラビア語の周辺言語に関する検討を行うこと。
- 3) 名詞句全般 (限定辞を伴った名詞句以外の限定名詞句や、所有表現など) にわたって考察すること。
- 4) 限定・非限定と他の文法事項との関連についても明らかにすること。

この4点が、今後の課題である。